

令和四年一月十日発行
皇學館論叢第五十四卷第四号
抜刷

吉田松陰における幽囚室教育の「生徒」・テキスト考

川
口
雅
昭

皇學館論叢 第五十四卷第四号
令和四年一月十日

吉田松陰における幽囚室教育の「生徒」・テキスト考

川口雅昭

はじめに

私は拙稿「吉田松陰における幽囚室教育の月毎変遷考」において、安政三年（一八五六）八月から翌、四年十一月までの、実家杉家の幽囚室における松陰の教育活動状況の月毎変遷を分析した。その結果、安政三年八、九月は家庭教育、十月は「私塾」教育に向けた「生徒」^①への基礎教育期間、十一月はテキスト等の準備期間、十二月から「私塾」教育が本格化し、安政四年六月まで継続された。そして、七月以降衰頹したことなどを解明した。^②

そこで、本稿では、安政三年八月から翌、四年十一月における幽囚室への主要来室者、そこでの使用テキストなどの分析を通して、教育内容・形態などを論考し、幽囚室教育の特質を解明したい。

幽囚室における主要来室者別教育活動状況

表1は幽囚室教育期の来室者・テキスト別述べ参加数一覧である。

漢 籍																														不明	總 計						
晉語六	國語	孝經	唐鑑	左伝増野	左伝杉百合之助	礼記 安政三年	礼記 安政四年	父師善誘法	資治通鑑	名臣言行録	蒙求	陳龍川文 安政三年	陳龍川文 安政四年	孟子	牧民忠告	禹貢	論語序	方正学文粹	中庸	名臣言行録後集	朱竹垞文粹	詩経集伝	三國志	唐宋八家文柳宗元・歐陽修	唐宋八家文歐陽修	唐宋八家文蘇洵	唐宋八家文大蘇	詩経品物図攷	懲忒録	古文所見集		魏叔子文抄	楊升菴文集	小 計	不明図書		
		1									2	7			5		3	1	6							1		1							27		46
						1									1																				2		31
															4		1														1				6	1	11
										0 (16)					0 (1)							0 (1)	0 (1)												0 (19)		0 (20)
																																			0		1
																																			0		3
						2																													2		4
																0 (1)																			0 (1)		0 (1)
					0 (9)																														0 (9)		0 (11)
										0 (3)											0 (1)														0 (4)		0 (6)
																	0 (1)																		0 (1)		0 (1)
																																			0		0 (2)
0	0	1	0	0	0 (9)	3	0	0	0 (16)	0 (3)	2	7	0	10 (1)	0 (1)	4	1 (1)	6	0	0	0 (1)	0 (1)	0 (1)	0	0	1	0	1	0	1	0	0	0	37 (34)	1	96 (34)	
1	4	1	2											4		1						1	1	2		1						1		19	1	82	
1	4	1	2	33		1								5		1						1	1	2	2	1	1			1		1		58	1	118	
							4							5	3	1		2																15	1	39	
																	1																	0		1	
															1																			1		1	
																																		4		5	
																		1																1		1	
																																		0		1	
																																		3		3	
																								2			1							1		1	
																											1							1		1	
																												1						1		1	
																																		1		1	
																																		0		1	
																																		0		1	
																																		1		1	
2	8	2	4	33	0	1	4	4	0	0	0	0	1	15	0	5	3	0	2	0	2	2	4	4	2	2	1	1	1	0	1	2	1	107	3	261	
2	8	3	4	33	0	4	4	4	0	0	2	7	1	25	0	9	4	6	2	0	2	2	4	4	3	2	2	1	1	1	1	2	1	144 (34)	4	358 (41)	

吉田松陰における幽囚室教育の「生徒」・テキスト考（川口）

吉田松陰における幽囚室教育の「生徒」・テキスト考（川口）

これより、安政三年八月より翌、四年十一月までの間、勉強会への述べ参加回数が多いのは増野徳民（百十八回）、吉田榮太郎（八十二回）、玉木彦介（四十六回）、岡部繁之助（三十九回）、佐々木梅三郎（三十一回）である。また、テキスト別述べ参加者数の多いのは『日本外史』会（延べ七十三人）、『春秋左氏伝』会（延べ三十三人）、『坤輿図識』会（延べ二十六人）、『孟子』会（延べ二十五人）、安政四年の『経済要録』会（延べ二十二）であり、松陰がいつ誰に何を何回教えたかなどが分かる。

そこで、以下、主要来室者別に幽囚室における教育活動状況を論考する。

（一）増野徳民

表2は増野徳民に対する教育記録である。

増野徳民は「周防国玖珂郡本鄉村字^{マコ}今中の医増野良庵^{マコ}の子で」、「安政三年十五歳の十月一日笈を負ひて松陰の幽居たる杉氏に寓し松陰に師事^{マコ}」した。松陰の「丙辰日記」、安政三年「十月朔日」の条には「増野徳民来り寓す。為めに左伝を読む^{マコ}」とある。これより、この日の増野の「来寓」を松陰が事前に知っていたこと、また、それは誰かの紹介であったことが推測される。とまれ、増野が松陰を目指して「来寓」したことはまちがいない。

「下田」事件失敗後の松陰の教育志向を考えれば、松陰は嬉しい反面複雑な心境だったものと思われる。それは、増野が武士の子ではなく、本郷村の勘場医^{マコ}「良庵」寛道の長男であり、いずれ父の跡を継ぐ立場にあることを知っていたと思われるからである。^{マコ}

一方、増野にとって、「来寓」の目的はあくまでも医者になるためであり、松陰の想いなど想像すらしていなかったことはまちがいない。^{マコ}

表2 増野徳民教育記録

		和書									漢籍												不明						
		日本外史	經濟要録	武教小学	周南の文	坤輿図識	山陽詩抄	長門金匱	農業全書	女誠訳述	計	春秋左氏伝	晉語	國語	礼記	孝經	唐鑑	孟子	論語序	朱竹垞文粹	詩経集伝	三國志	詩経品物図攷	唐宋八家文柳宗元・歐陽修	魏叔子文抄	計	不明	計	
年	月																												
安政3	8																												
	9																												
	10											30			1											31		31	
	11											3														3		3	
	12	12									12	1	4		1	2										8		20	
安政4	1	11	10	2	1	9	3	1			37							5								5	1	43	
	2				8						8																	8	
	3								1		1									1	1					2		3	
	4																						1			1		1	
	5																							1				1	
	6									1	1												1	1	1	2	1	6	7
	7																												
	8																		1									1	
	9																												
	10																												
	11																												
計		23	10	2	9	9	3	1	1	1	59	33	1	4	1	1	2	5	1	1	1	2	1	2	2	1	58	1	118

では、松陰が増野に対し、十月一日から十一月四日まで、計三千三回にもわたり一対一で『春秋左氏伝』会を行った目的は何であろうか。それは三点ある。

一点目は、増野の「学力」などの様子見であり、「落ちこぼれ」対策である。⁽⁸⁾ 本郷村出身の増野を迎え、松陰の頭を過つたのは、嘉永四年（一八五二）の江戸で、藩地萩と江戸との学力差に「落ちこぼれ」た自身の体験であろう。そこで、松陰はその対策として、拙稿「吉田松陰における幽囚室教育の月毎変遷考」で述べたように、「経書」を終えた者が「つぎて必（ず）よむ」べき「中夏の史」である『春秋左氏伝』をテキストとして、増野の学力を見なが

ら「落ちこぼれ」対策を行いつつ、学力向上を図ったものと思われる。

二点目は医者育成の基本としての漢学教育である。江戸時代の医者養成を見ると、後藤良山の門人であった香川修庵（一六八三—一七五五）は「儒医一本論」を説き、「聖道（儒学）と医術は一本として学ぶべきであると儒医一本説を主張した。修庵にとって、聖道を学ぶことは身を修めることであり、身を修めることは無病が肝要である。したがって無病のために医術を学ぶことは、聖道を学ぶことと一本である」と述べた⁽¹⁰⁾という。また、「虚弱だが優秀な少年」であった杉田玄白は「医者の子は医者という当時の慣習に従い、十八歳のころから、漢学を古文辞学派宮瀬龍門（一七二〇—一七二一）に、紅毛流医学を幕府奥医者西玄哲^{にしげんてつ}に学び、医者への道を進んだ」とある⁽¹¹⁾。更に、「蘭学者の家に養子に入った」宇田川榕庵は「すぐに蘭学学習を欲したが、宇田川玄真（一七七〇—一八三五）は、「まず『素問』・『靈樞』・『傷寒論』などの中国医学書や本草学・名物学を徹底的に学習させた。それは、『家学漢土文章為主、文章不成則学不能成』（自叙）という、医学は漢学が基本であるという玄真の方針からであった。（中略）榕庵が玄真の指示で、漢学を基礎としてしっかり身につけたことが、漢語の本質的意義を理解した適正な翻訳につながり、現代にまで通用するものとなった」と評されている⁽¹²⁾。これより、松陰が増野に施したのは医者となるための基礎教育でもあったことが分かる。

三点目はシンパサイザー育成に向けての基礎教育である。拙稿「吉田松陰における幽囚室教育の月毎変遷考」で述べたように『春秋左氏伝』の基底にある思想は松陰の抱いていた思想と同じベクトルにあった。しかし、本郷村からのぼつと出の増野にいきなり尊王攘夷論を説くほど松陰も若くはなかった。松陰は懇切丁寧に増野に『春秋左氏伝』の説く倫理を語ったのであろう。そして、松陰という人格を通じ、それは確実に増野に定着したものと思われる。この基礎教育は十一月に終了した。

その後、十二月以降、松陰は増野を『日本外史』会（二十三回）、『經濟要録』会（十回）、『周南の文』会（九回）、『坤輿図識』会（九回）、『孟子』会（五回）に参加させている。私はここから増野に対する、シンパサイザー養成教育の開始だったと考える。

その際、松陰は最初に増野を吉田榮太郎とカップリングしている。榮太郎は嘉永六年、十三歳の三月から翌、七年四月迄「江戸番手道中御到来方御昼旅籠払方手子」^⑬として江戸往復を経験していた。来栖守衛の「米国のペリーが軍艦を率ゐて浦賀に來り和親通商を求めたのがこの歳六月で榮太の江戸にある時のことであつた、敏感な榮太には何等か思想上に影響することがあつた筈だと思はれる」^⑭との指摘を待つまでもなく、リアルタイムで、それも江戸でペリー艦隊來航の衝撃を体験した榮太郎は、松陰からすれば「同志」、一方、増野には異次元の存在だったはずである。増野は榮太郎から有形無形の影響を受けたものと思われる。これこそ、松陰が周到に狙ったものであつた。

「関係人物略伝」が増野について、後のこととして、「松陰の命を受けて、品川彌二郎と奔走したり」、「万延元年頃は主として久坂玄瑞の指導を受けて国事に活動せるも、惜しむらくは文久二年三月五日捕へられて山代に送還、父の厳に禁ずるありて遂に出づる能はず。維新後は山間の一医師として世に立ちしも、常に恩師同門に背けるを思ひて娛^⑮しまず」と述べていることを見れば、結果的に、松陰の教育はその期待以上に成功したことが分かる。

（二）吉田榮太郎

表3は吉田榮太郎に対する教育記録である。

榮太郎は在萩の「足輕清内の長男にして、吉田姓を自称す。天保十二年正月二十日生る。久保五郎左衛門の松下村塾に入り勉学、嘉永六年十三歳にして江戸に下り、藩邸の小者として仕へ、萩と江戸とに往復すること数度、家計の

表3 吉田榮太郎教育記録

		和書											漢籍															
		日本外史	經濟要録	武教小学	周南の文	周南の文	坤輿図識	山陽詩抄	長門金匱	農業全書	茶山詩	新策	女誠訳述	計	晉語	國語	孝經	唐鑑	孟子	禹貢	朱竹垞文粹	詩經集伝	三国志	唐宋八家文歐陽修	魏叔子文抄	計	不明	合計
年	月																											
安政3	8																											
	9																											
	10																											
	11																											
	12	12												12	1	4	1	2								8		20
安政4	1	11	10	2	1		9	3	1					37					4	1						5	1	43
	2				8	1								9														9
	3									1				1							1	1				2		3
	4										1			1									1			1		2
	5											1		1														1
	6												1	1									1	1	1	3		4
	7																											
	8																											
	9																											
	10																											
	11																											
計		23	10	2	9	1	9	3	1	1	1	1	1	62	1	4	1	2	4	1	1	1	2	1	1	19	1	82

ために志を伸ばすこと能はざるを恨みつ
つ、私かに文武の業に勉めたり。安政三年
十六歳の十一月二十五日、初めて幽室の松
陰に教を乞ひ、後世、「識見と才智ある
俊英にして高杉・久坂・入江と併せて松下
村塾の四天王」と称せられる人物である。
安政四年五月二十日、松陰は「榮太郎年
甫めて十三、初めて江戸に役す。会々墨夷
の変あり、深く自ら奮励し、武技を学びて
以て效す所あらんと欲す。其の後、家を辞
して遠く遊ばんことを謀りしも、事諧はず。
丙辰の冬、余に囚室に謁し教を受けんこと
を請ふ。余試みるに韓退之の、『符、書を
城南に読む』の詩を以てす。榮太屑しとせ
ずして曰く、『吾れの学を為す、寧んぞ是
れが為めならんや』と。又孟子の百里奚を
諫めざるを以て智賢と為すを論ずるを読ま
しむ。悦ばずして曰く、『諫めず死せず、

何を以て智賢と為さん」と。余頗る之れを奇とし、語るに学の方を以てす。榮太蓋し内に契るあり、悉く武技を排し、余に従ひて日夕書を読む¹⁷⁾と記している。

松陰同様、リアルタイムに江戸で受けた「墨夷の変」の衝撃に際し、「深く自ら奮勵し、武技を学びて以て效す所あらんと欲」したと語る榮太郎に、松陰が「同志」を感じたことはまちがいない。また、榮太郎の、良き人たるための勤勉な学問奨励を説く韓退之の詩への反発や『孟子』萬章上九章にある、王を諫めず、祖国を捨てた虞人百里奚への非難に対する「頗る」「奇」との評価は、松陰の最大の賛美であろう。松陰が榮太郎を自分同様行動の人と見た証左である。しかし、後、安政四年八月、「榮太は才氣鋭敏にして善く大事を論ずれども、而も学を修むることは則ち懈る¹⁸⁾」と評しているように、学問が足りない¹⁹⁾と見た。そこで、松陰は榮太郎を眞の「同志」とすべく、学問、つまり、理論武装の意義を説いたものと思われる。松陰の榮太郎への期待が如何に大きいものであったかが分かる。一方、「内に契る」ところがあり、「悉く武技を排し」て松陰に「従ひて日夕書を読む」という榮太郎も松陰に感じるものがあつたのであろう。

この意味において、榮太郎は、私が私塾教育の基本的条件の一つと考える、「その師匠に学びたいと願」つて「参集」した「外来者」の代表ともいふべき存在であつた。

この榮太郎のことを、久保塾で同窓だつた伊藤博文は、「萩の城下に於て十二歳の頃入門せるは、久保五郎左衛門と称する人の家塾にて、是れ即ち予に取りては第二の師なり。久保塾は当時七八十人の門生あり、奨励の為之を東西両組に分ち、各組共に首席より五人迄は、相撲なれば所謂幕の内とも称すべき処にて、師より特に号を与へられたり。予は伊文公と称せられ、何人にも後れを取らざりしが、独り吉田稔丸と称する者には一籌を輸したり。彼は実にな稟の英才なり²⁰⁾」と評している。

将に、榮太郎は、松陰が待ちに待った、行動力があり、社会経験も豊富な、「足輕」身分とはいえ、武士階級の「識見と才智」を兼ねた最初の来室者であった。

安政三年十一月二十五日に来室した榮太郎を、松陰は六日後の十二月朔日に増野と二人の『晉語』会に一回参加させただけで、以後、『日本外史』会（二十三回）、『経済要録』会（十回）、『周南の文』会（十回）、『坤輿図識』会（九回）、『孟子』会（四回）などに参加させている。

『日本外史』は拙稿「吉田松陰における幽囚室教育の月毎変遷考」でも述べたとおり、「武士」の「至上の道德的義務」を「勤王」「尊王」とするものである。

『経済要録』は佐藤信淵が著した経世書で、「有無相交易して人民に便ならしむることは、国家を領する者の最緊要なる専務にして、固より百姓町人等に任ず可きの理あることなし、元来國を富すの機密なる者は、大半交易の業に在ることなり、可不察哉」と説いているように、交易による経世済民を説いたものである。これは松陰が生涯主張した、政治は「万民を安んず」⁽²²⁾るためにあるとの信念に合致する。

『坤輿図識』は「本邦初の世界地図である弘化元年刊『新製輿地全図』を刊行した」算作省吾が「その解説書として編んだ世界地誌」である。「ヨハン・ヒューブナー (J. Hubner 一六六八—一七三二) 著『一般地理学 (Allgemeine geographie)』を始めとする多くの海外地理書を参酌して世界各国の地理や現況を体系的・網羅的に記している。『世界六大州の州毎に、まず各州の『総括 (地名・領域・氣候・文化・人口等)』を述べ、続いて各国の地理的事項 (『総括』同様の項目のほか人種・風俗・物産・政体など多面的に記述) を詳述するが、適宜、各国の歴史的人物にも触」れている。「内憂外患の幕末期に海外情勢を把握する最重要の書とされ、井伊直弼や吉田松陰などの為政者・思想家や幕末の志士らに多大な影響を与えた」⁽²³⁾といわれる書である。

『孟子』は松陰の最も得意とした書で、松陰が「生」の意義と見た「義」の実践を強調するものである。

これらを見れば、榮太郎への教育は理論武装を目的としたものであることが分かる。

また、特筆すべきは、榮太郎に対しては、安政四年二月の『周南の文』会（一回）、四月の『茶山詩』会（一回）と、個人教育は二回のみで、他は全て集団教育だったことである。⁽²⁴⁾ この理由は二つ考えられる。松陰は榮太郎に対し、一、リアルタイムに江戸で経験したペリー艦隊来航の衝撃、そこからの攘夷思想、萩藩ではなく、日本国、更には皇国という国家観、そこからの尊王思想など、具体的経験や社会経験に基づくものの見方、考え方を他の来室者に伝える役割を期待した。二、初来室時、松陰が榮太郎の韓退之の詩や『孟子』への反発を「奇」と評したように、「識見と才智」を認め、その要を認めなかったからである。

一方、榮太郎の参加記録のある集団教育に、松陰は、安政三年十二月は榮太郎の全参加勉強会二十回全てに増野を参加させ（一〇〇%、他の参加者は玉木彦介、岡部繁之助のみ）（内十回（五〇%）が榮太郎・増野の二人のみ）、また、安政四年一月から十一月迄の六十二回の内五十八回に増野を参加させている（九三・五%、他の参加者は玉木彦介、岡部繁之助のみ。内二十四回（三八・七%）が榮太郎・増野の二人のみ）。

これより、松陰は榮太郎を社会的経験の乏しい増野とカップリングして「琢磨淬励」⁽²⁵⁾の關係に置いたことが分かる。来室時、増野に『春秋左氏伝』を、榮太郎に韓退之の『符、書を城南に読む』や『孟子』を読ませていることを見れば、二人は学力に関しては「琢磨淬励」の可能性関係だったものと思われる。しかし、それ以上に、松陰が榮太郎に期待したのは、上述したように、榮太郎の具体的経験や社会経験に基づくものの見方、考え方を増野に「体察」⁽²⁶⁾させることであろう。これは、他の来室者に対しても同様だったものと思われる。⁽²⁷⁾ 松陰が「生徒」理解に基づき、巧みに「生徒」を組み合わせていることが分かる。

しかし、「生徒」である榮太郎から直接他の「生徒」にペリー艦隊来航の衝撃から「尊王攘夷」思想などを語らせた、松陰の指導方法は感嘆の他ない。他の「生徒」は松陰が語ることに相まって、否、それ以上に、対抗心・羨望・身近な関係などもあり、同年配の榮太郎が語る経験・そこからの尊王攘夷思想などを吸収したと思われるからである。その意味で、榮太郎は幽囚室教育において松陰の「助手」でもあった。

榮太郎の来室一ヶ月後の安政三年十二月晦日、松陰は「除夜読後の作、増野・榮太二生に示す。是れより先き連夜二生と読み、率ね常に曉に徹す。是の夜課書未だ畢らざるに、已に晨餐を報ず。相對して快と称す。増野は山代の医生、來つて吾が家に寓する者、榮太は乃ち隣舎の兒なり」と題し、「敵国未だ滅びず、歳また終る、一心百感交々相攻む。龍去り蛇来る常事のみ、其の羈勒鉄驄を死せしむるを奈せん。永鳥已に放たれ宮部罷めらる、啓藏先きに逝き新三同じ。同好更に永有隣あり、餓寒歳を守る岸獄の中。是れ皆駿足一もて万に敵す、天何ぞ馳突の功を猜忌する。其の余三両驂々たる者、機を得れば逸し去り勢を失へば備し。未だ衰漢の清議に頼るを見ず、早く已に弱宋甘んじて戎に和す。汝が輩力学独り予を起す、此の夕將に艾きんとして両瞳炯かなり。二生同庚、好匹敵、才力況や又相降らざるをや。博学祇だ応に弱冠に及ぶべし。妨げず入学成童を踰ゆるを。榮太兵を論ずるに形勢を重んず、多とす汝が再度江東に入るを。徳民は医師、当に国を医すべし、且く百草を嘗めて神農を師とす。郷を離れて来り托す志見るべし、墻を隔てて胥居る情豈に空しからんや。吾れ二生を得て稍々意を強うす、且つ喜ぶ明朝韶光の通ずるを」⁽²⁸⁾と詠んでいる。表題の「連夜二生と読み、率ね常に曉に徹す。是の夜課書未だ畢らざるに、已に晨餐を報ず。相對して快と称す」より、安政三年十二月、松陰、榮太郎、増野の勉強会は連夜明け方まで行われていたこと、大晦日は課題を決めて実行し、朝食時間にまで及んでいたことが分かる。⁽²⁹⁾

また、本文の「敵国未だ滅びず、歳また終る、一心百感交々相攻む。龍去り蛇来る常事のみ、其の羈勒鉄驄を死せ

しむるを奈せん」より、松陰が攘夷の志を堅持しており、故に有為賢材の士を要する秋に、俊傑の士を投獄したり、死に追いやるとは何事であるか、と憤慨していること。「未だ衰漢の清議に頼るを見ず、早く已に弱宋甘んじて戎に和す」より、幕府はそのような憂国の士を頼まず、却って「夷狄」との和議に奔走している、と幕政批判を行っていることが分かる。しかし、それ以上に注目すべきは、すでにこの時点で、増野がこのような話ができる状態になっていることである。それは、「二生同庚、好匹敵、才力況や又相降らざるをや」より、増野が榮太郎の「好匹敵」者、「才力」伯仲するまでに成長した、と松陰が認識していること。そして、「吾れ二生を得て稍々意を強うす」より、そんな増野・榮太郎の存在を松陰が頼もしく感じている、と詠んでいることよりも分かる。松陰の教育は確実に実を結んでいた。

その後、安政四年九月、松陰は榮太郎の江戸行に際し「上張地」を「贖」とした際、添えた手紙に、「貴所ならでは孰れか微志を継ぎ申すべし。兼ても申し述べ候通り其の人あらば貴所力を添へられよ、若し其の人なく候はば貴所が即ち其の人と存じ候^{③①}」と述べている。また、在江戸の同志長原武宛には榮太郎を「僕視ること猶ほ阿弟のごとし^{③②}」と記し、桂小五郎には、「此の生僕甚だ愛する所、前途期すべしと存じ候。僕鑑定の処は此の生の名字説其の外書き与へ候詩文にて御承知下さるべく、老兄御目鏡に乗り先々有用と思召され候はば、然るべく御教示頼み奉り候。此の生心事、小生近況、直々御聞取り下さるべく候。外に小倉健作の事、此の生へ任せ置き候、趣次第御指示頼み奉り候。其の他宜しきを計り齋藤父子・櫻任藏・松浦武四郎などへ御紹介、小生の近況相通じ度く、邸中にても來島など同断、相模へも参り候はば來原同断、其の他内外有志のものへも然るべく御頼み仕り候。僅かの在府、逆も読書と申す程の事は覺束なく、唯だ天下の人物を閲し其の末議を聞き候肝要と頼み奉り候^{③③}」と送っていた。

後、安政五年六月十日、榮太郎は「里村伯父」に宛て、「今度公儀には彼重墨利加使節と条約相成」ったことは「殊

の他の事にて、「公儀役人衆、兎角垂墨利加ニ口説かれ、いひこめられ」た結果である⁽³³⁾。「今度右之段京都被聞召御叡慮を被為惱、何分右之次第一々相許候而は、日本終に衰微に相成り候」とか、「孰れ近年之内、乱世とも相成可申と評判仕候付私どもも心支度仕居候」、「尚又去月廿五日、殿様御意之趣、有之私拝見仕、実ニ落涙仕候何卒文武精鍊仕貳百年來之大恩報じ度事ニ御座候⁽³⁴⁾」と送っている。これとその他の榮太郎の「志士」⁽³⁵⁾としての人生を見れば、松陰の教育は期待通りに成功したことが分かる。

(三) 玉木彦介

表 4 は玉木彦介に対する教育記録である。

天保十二年（一八四一）生まれの玉木彦介は、「松陰の叔父玉木文之進の嫡子なり。幼より父及び松陰に従ひて学ぶ。松陰の『士規七則』はこの徒弟のために書かれたものなり。安政二年父に従ひ相模の戌に赴き江戸に遊ぶ。翌年帰国後は松陰の幽室に起居を共にして学ぶ。その後松陰は常に彦介のよき指導者なり⁽³⁶⁾」といわれる人物である。

表 4 玉木彦介教育記録

		和書								漢籍									
年	月	武教小学 安政三年	武教小学 安政四年	日本外史	經濟要録	山陽詩抄	周南の文	計	蒙求	陳龍川文	孝經	方正学文粹	禹貢	孟子	論語序	唐宋八家文蘇洵	唐宋八家文歐陽修	計	合計
安政3	8	1						1											1
	9	2						2	2									2	4
	10									5								5	5
	11									2								2	2
	12			1				1			1							1	2
安政4	1		2	7	1	3		13				5	3	5				13	26
	2						1	1				1						1	2
	3																		
	4																		
	5					1		1								1		1	2
	6															1	1	1	
	7																		
	8														1		1	1	
	9																		
	10																		
	11																		
計		3	2	8	1	4	1	19	2	7	1	6	3	5	1	1	1	27	46

松陰が彦介の教育に言及したのは嘉永四年六月二十八日以後のことであつた。松陰は叔父玉木文之進に、当時十一歳の彦介のことを、「令肖御壯健、旧に仍り獵好の由、一段の事と存じ奉り候。土作の色想像致し候。因つて相考へ候、武士は壯健にぞだち申さず候ては物前の用に立たざるは勿論なり。尚ほ十余歳に成り候ては根氣強く物に堪へ候様の修行肝要に存じ奉り候。然る処堅忍と壯健とは常に相因るものに付き、何分其の御心得申すも愚かに存じ奉り候。(中略) 安きに居て危を忘れず、夫の堅忍壯健御求めさせ專一に存じ奉り候」⁽³⁷⁾と書き送っている。松陰は「堅忍と壯健」を目標にあげ、彦介の以前からの「獵好」を「壯健」に育つ素と賞賛する。そして、「堅忍」＝「根氣強く物に堪へ候様の修行」を奨励している。

また、翌、嘉永五年、実家杉家屏居待罪中の読書記録である「睡余事録」五月の条に、「玉木彦介来る、為めに詩経を読む」⁽³⁸⁾とある。これより、松陰がこの時点で彦介に教育を行つてゐることが分かる。しかし、九月の段階でも、「竟日、玉彦介・口壽次をして詩経を習読せしむ。而して手づから犯彊録を写しつゝ、耳にて読法の善悪を聴きて、為めに之れを正す」⁽³⁹⁾とあり、教育は「読法」中心であつたものと思われる。

その意味で、安政元年十一月二十三日以前、松陰が十四歳の彦介へ贈つた「從弟玉木彦介に与ふる書」は興味深い。昔東方朔は年十二のとき、書を学ぶこと三冬にして、文史用ふるに足り、曹植は十歳余にして、詩論を誦読し、辞賦十余万言、陸雲は六歳、荀勗は十余歳、皆善く文をつくる。陸續は六歳にして袁術に見え、孔融は十歳にして李膺に造る、皆其の奇として嘆ずる所となると。古人かくの如き類甚だ多し。今足下も亦十余歳、当に自ら表見する所あるべし。知らず、近日修むる所は何の業ぞ、読む所は何の書ぞや。僕足下の国史を読まんことを望む。漢事に明かにして国事に茫乎たるは、学人の通病なり。故に宜しく先づ国史を読むべし。国史は近古より始めよ。上古は幽遠、中古は悠優にして、其の史皆読み難し、幼学の及ぶ所に非ざればなり。近古は又宜しく藩史より始

むべし。今且く陰徳記を把りて一読せよ。記は刻本世に多くあり、字画諧正にして、地名、人名並に旁訓を附す。文又頗る文縉にして、読者をして楽しみて倦むことを忘れしむ。温故記・吉田語に比せば、大いに幼学に便なり。僕又足下の楷書を学び、兼て抄録謄写等の事を習はんことを望む。是れ小事と雖も亦読書人の要務にして、忽せにすべき所に非ざるなり。其の他足下に望むものは尚ほ多し。未だ遽かに注告せざるは、敢へて之れを吝むに非ざるなり、憤悱を待ちて而して後之れを啓発せんと欲するのみ。僕の兄弟行、年少くして成立を望むべき者は、独り足下あるのみ。されば則ち僕の足下に望む所、豈に是れのみに止まらんや。足下宜しく深く自ら激昂し、嚶々然として、古人を以て期と為すべし。尊大人、客に接し府に朝せらる、想ふに当に事務繁劇なるべし。庭に趨るの間に或は寅（次郎）の事に及ばば、幸に寅困辱に居ると雖も、志氣撓まず、人に向ひて苦言すること、尚ほ能くかくの如しと白せ。不宣⁴⁰

松陰は最初に、幼少時より学問に励み名をなした古代中国の「東方朔」他何名かを挙げ、「足下」も「十余歳」だから、「当に自ら表見する所」があるべきであろう、と彦介を激励する。そして、「漢事に明かにして国事に茫乎たるは、学人の通病なり」と述べ、「国史」学習を「望む」という。その「国史は近古より始めよ」と記す。それは、「上古は幽遠、中古は悠優にして、其の史皆読み難」く、「幼学の及ぶ所」ではないから、という。また、「近古は又宜しく藩史より始むべし」として、「陰徳記」を奨励する。「陰徳記」＝『陰徳太平記』とは、『太平記』の形式で、戦国から江戸初期の、中国地方における毛利氏の活躍を描いた戦記で、一代にして中国地方と北九州の一部を領有する大名となった毛利元就（洞春公）を理想的人物として描いた軍記である。文体は混淆文で、難字や人名にはルビが付しており、初学者に適したテキストであった。松陰も「刻本世に多くあり、字画諧正にして、地名、人名並に旁訓を附す。文又頗る文縉にして、読者をして楽しみて倦むことを忘れしむ。温故記・吉田語に比せば、大いに幼学に便なり」

と評している。

更に、「楷書」や「抄録謄写等」の学習も「望」んでいる。それは、「小事」とはいえ「読書人の要務」であり、「忽せにすべき所」ではないから、という。また、「未だ」にお前を「遽かに注告」しないのは、「敢へて」「吝む」からではない。お前の「憤悱を待ちて而して後之れを啓発せんと欲」しているからであるとして、「僕の兄弟行、年少くして成立を望むべき者は、独り足下あるのみ」と述べている。そして、「足下宜しく深く自ら激昂し、嚶々然として、古人を以て期と為すべし」と続け、「庭に趨るの間に或は寅（次郎）の事に及ばば、私は「幸に」、「困辱」＝野山獄に「居ると雖も」、今も「志氣」は「撓」んでいない。そして、「人に向ひて苦言すること、尚ほ能くかくの如し」と「尊大人」玉本文之進先生に「白せ」と述べ、最後を「不宣」と結んでいる。

この「書」に関する兄杉梅太郎からの書には、「彦介に与ふる書、説き聞かせ候処、大いに奮発致し居り候。此の節答書の吟味頻りに致し候様子、時々御振子御頼みいたし候」とあった。松陰が彦介の学問レベルを「幼学」と記していることと併せ、松陰が更にその勘返状に「劣弟意外の喜び、足を企てて答書等待つのみ」⁴¹と記しているは注目される。

松陰からすれば、彦介は「従弟」であると共に、「尊大人」玉本文之進の息子である。よって、「彦介に与ふる書」は、松陰が彦介のあり様を憂い、これでも筆を抑えて呈した書であることはまちがいない。それを兄梅太郎は今後も「時々」頼むと返し、松陰も彦介の「奮発」を「意外の喜び」と記している。私はここに松陰及び兄梅太郎の彦介への期待と不満を感じる。

安政二年一月五日、彦介の「加冠」の儀が行われた。⁴²松陰は祝いとして、「今日よりぞ幼心を打ち捨てて人と成りにし道を踏めかし」⁴³と詠み「士規七則」⁴⁴を贈った。

松陰は「士規七則」の冒頭に読書、実践の意義を説く。そして、第一則に「人の人たる所以」として「忠孝」を、第二則に皇国Ⅱ「吾が宇内」の「尊き所以」として「万葉一統」を、第三則に松陰が生涯武士の「生」の意義とした「義」の意味を、第四則に武士のあるべき生き方として「光明正大」、第五則に「読書尚友」、第六則に「交友」を、そして、第七則に「死而後已」というそれらの継続、徹底の意義を説いている。これは一般論ではない。彦介のための教えである。とすれば、この時点でも、松陰にとつて彦介は、読書の要から説かねばならない存在であったことが分かる。

その後、彦介は安政二年一月二十日から翌、三年二月十五日の間、父玉木文之進の相模警備に同行した。出発に際し、松陰は「従弟毅甫相模に戌せるに寄す」と題した漢詩を寄せ、「喜ぶ子が武技を習ひ、兼ねて読書の功を励むを」と、「初陣」に際し「武技」「読書」に「励む」彦介を褒め、また、「昔賢また人のみ、古道豈に窮め難からんや」と、「昔賢」も我々と同じ人である、よつて、お前も日夜「業」を「修め」、「古道」を「窮」めよ、と激励している。また、翌、三年二月の帰国時、「従行す吾が阿戌、長大、力鉤を舒ぶ」と詠っているところにも、松陰の彦介の成長を願う思いを見ることが出来る。

その後、彦介については、『講孟劄記』安政三年三月二十三日に、「余をして志を得せしめば、朝鮮・支那は勿論、満洲・蝦夷及び豪斯多辣理を定め、其の余は後人に留めて功名の地となさしめんのみ、如何如何と。毅甫大いに笑ふ」とあり、同年五月十四日には、「今世学問をする者已れの年少を待み、何事も他日と推延ぶる者あり、殊て知らず、人生一世間、白駒の隙を過ぐるが如し、仮令百年の命を全くすとも、誠に暫時の間なり。況や五七十ならずして死する者世には甚だ多し。加之、朝露の如きの命もて測り難きの禍患患難を待つ、実に一日も覺束なき浮世にて、何ぞ他日他年に推延べ、寿を待みて疑貳猶予すべけんや。時に在座の人、高洲生瀧之允、年二十二、佐佐木生梅三郎、年十七、

玉木生彦介、年十六、而して余年二十七。故に是れを云ひて以て相勵(49)ます」との記録を見ることができるところが、同三年八月以降の「武教全書講録」に、松陰は彦介のことを、次の様に記している。

余が従弟殺甫漁獵を好み、命となし、風雨寒暑憚る所なし。或は獲物なくして徒らに還るとも敢へて悔いず。余曾て戯れて云はく、「清人の詩に、『貪りて水に臨み去くことを為し、魚を得て帰るを羨(50)ます』とは足下の謂なり」と。殺甫悦ばず。因つて又六益二害の説を挙げて、獲物の論するに足らざるを曉す。殺甫乃ち大いに悦ぶ。

これより、彦介は十六歳になつても、依然、「漁獵」を「命」とする青年であつたことが分かる。ここに私は『講孟劄記』にある、三月に「大いに笑」つたという彦介と五月に「寿を待みて疑貳猶予すべけんや」と叱咤した松陰に距離を感じる。彦介は余りに無邪気に過ぎ、一方、松陰は真剣であつた。

では、松陰はこのような彦介にどのような教育を施したのであろうか。

安政三年八、九月と記録の残る家庭教育『武教小学』会後、九月から十一月の間は全て個人教育であつた。それは、九月の『蒙求』会（二回）、十、十一月の『陳龍川文』会（七回）である。

『蒙求』は中国唐代の兒童用教科書である。その書名「蒙求」は『易』の蒙卦に「我童蒙に求むるにあらず、童蒙我に求む。——我匪求童蒙、童蒙求我。——」ということばがある。道というものは、先生（我）が自分から出かけていって生徒（童蒙）に教えるものではなく、生徒（童蒙）の方から出向いて先生（我）に聞くのが妥当である。（しかもその態度たるや、誠意のある真剣さが必要で、二度も三度も聞き返すようでは、先生を馬鹿にしているばかりでなく自分自身を汚すものであり、このようなものには教えないのが本当である）の意。ここから採つて名づけたもの(51)といわれる。また、内容は「童蒙の求めに応じて」、「四字句」で「忠臣孝子、公正廉潔の士を歌い、大学者、老將軍、女丈夫、良妻賢母」などの「話」を「次々に述べ」たものである。つまり、「中国における五百六七十人の興味ある智識をたやすく与え

てくれるところから、わが国では王朝時代より明治末まで初学者必読の書として孝経・論語とともに必ず繙かれたものであった⁽⁵²⁾といわれる。これより、松陰が『蒙求』をテキストとしたことは、学問の心構え・厳しさ、中国の忠臣孝子烈婦に関する基礎知識等を彦介に修得させることが目的だったものと思われる。

また、十月からの『陳龍川文』は陳亮、号は龍川の『陳龍川文抄』のことと思われる。朱熹の論敵として知られた陳亮の「政論は条理を尽し、憂国の熱情にあふれ、日本でも江戸時代末に愛読され」、「詞では豪放な風格をもち、激越な感情をこめた作が多い⁽⁵³⁾」と評されている。よって、これは彦介の心情を鼓舞することが目的だったのであろう。その後、安政三年十二月、松陰は彦介を『日本外史』会・『孝経』会へ参加させている。これは内容はいうまでもないが、榮太郎・増野らの勉強振りを見せ、彼ら、とりわけ榮太郎からの影響を期待したものだったのかもしれない。

しかし、その一方で、安政四年一月、松陰は彦介に個人教育を行っている。方孝孺の『方正学文粹』会である。これは松陰が生涯「節義の士」と崇拜した方孝孺の文集である。そこには、「士之可貴者、在氣節不在才智⁽⁵⁴⁾」とか「国家可使数十年無才智之士、而不可一日無氣節之臣⁽⁵⁵⁾」と、「才智」ではなく「氣節」を強調した詩が見られる。これも、彦介の心情鼓舞が目的と思われる。また、同時に『孟子』会への参加は注目される。これも、彦介の「氣節」・「義」の理解を深めるのが目的だったものと思われる。

以上、松陰が手を変え品を変え、彦介の学問への関心、学習意欲喚起を継続していることが注目される。

後、元治元年（一八六四）十一月、彦介は「御楯隊に入り」⁽⁵⁶⁾り、後、「慶応元年高杉晋作・山縣狂介等の藩論統一運動起るやこれに加はり、その正月十六日美禰郡繪堂（いま美東町）に恭順派と戦ふ。重傷を負ひ海禪寺に還りて歿す。同月二十日なり。享年二十五。明治三十五年正五位を贈らる⁽⁵⁶⁾」との人生を生きた。これを見れば、彦介はそれなりに松陰の教育に「応えた」ことが分かる。

(四) 岡部繁之助

表5は岡部繁之助に対する教育記録である。

岡部繁之助は天保十三年、萩藩士岡部藤吾の次男として萩に生まれた。母は松陰の畏友來原良藏の姉「阿喜久」⁽⁶⁷⁾で、「関係人物略伝」が「安政三年八月松陰に兵学入門の起請をなし、十二月一日幽室に松陰を訪ひて引続き教を受け、安政五六年の交、兄弟共に松陰を援けたり。松陰は『子楫の母賢にして弟は友なり、以て家を託するに足る』と賞せり。六年五月松陰東行の際送別の詩を賦す。松陰これを見て、『この人吾れ嘗て友弟を以てこれを目す。清太（外弟久保清太郎）も亦以て然りとす、愛すべきなり』と評せり。以て親密の度を察すべし」⁽⁵⁸⁾と評す人物である。また、ここにあるように、二歳年長の兄富太郎子楫は安政四年に松陰の「門下生」となった。繁之助の兄岡部富太郎について、「関係人物略伝」に「松陰の友來原良三の甥なり。幼より良藏・土屋蕭海等に学び又明倫館にて文武を兼修す」⁽⁵⁹⁾とある。このような家庭環境であれば、繁之助もほぼ同じような教育歴を有していたものと思われる。

この繁之助に、松陰は十二月十日午前、個人教育で『父師善誘法』会（十八日までに計四回）を行い、午後、すでに

表5 岡部繁之助教育記録

		和 書						漢籍								
年	月	日本外史	武教小学	周南の文	兵要録	新策	精里三集	計	父師善誘法	孟子	禹貢	論語序	中庸	計	不明	計
安政3	8															
	9															
	10															
	11															
	12	8			1			9	4					4		13
安政4	1	8	2					10		5	3			8	1	19
	2			1				1					2	2		3
	3															
	4															
	5					1		1								1
	6						1	1								1
	7						1	1								1
	8											1		1		1
	9															
	10															
	11															
	計	16	2	1	1	1	2	23	4	5	3	1	2	15	1	39

十二月二日より榮太郎・増野と行っていた『日本外史』会（八回）、に参加させている。また、十二月十九日には個人教育『兵要録』会（一回）を行っている。

松陰が来室した繁之助をいきなり、「尊王」を説く『日本外史』会に参加させたのは、「尊王」の理論武装・強化が目的であろう。松陰が岡部の基礎学力・思想的ベクトルを認めていたからと思われる。

では、『父師善誘法』は如何であろうか。この書は、清朝の唐彪（一六四〇―一七二三）の手になる教育書で、「上巻は教師論」、「下巻は教授法」⁽⁶⁰⁾である。松陰は何故こんな本をテキストとしたのであろうか。廣瀬豊は、「私はかねて松陰は教育の事に始終注意し、其方面の書籍を沢山読んだらしく想像して居た」として、その理由を「教育は実に儒教の最大事であり、又社会改革者の首要な着眼点であるばかりでなく、松陰自身が目下教育者としての心得のためと、門弟に教育其物を教ふるためであつたと思ふ。寺小屋教育の門弟は習ふと同時に、教ふる教師であるし、子弟たる自分等は早晚父として又兄として、子弟教育に従事すべきものであるからである」と述べ、『父師善誘法』をテキストとした理由を、「然しながら岡部氏が始めて来た時に此本を教へたといふのは、矢張り生徒の学習上の為にと、文章が平易である事から思ひついた事であらう」と推測している⁽⁶¹⁾。

私は以下の二点で、この廣瀬のいう理由に疑問をもっている。それは、一、表6にあるように、安政三年十二月の来室・受講者は増野徳民、吉田榮太郎、玉木彦介、そして、岡部の四名である。廣瀬のいうように、『父師善誘法』の「文章が平易」だったのであれば、この月、初学者向けのテキストである『孝経』の会に参加させた増野・榮太郎・彦介も『父師善誘法』会に参加させたはずである。二、『父師善誘法』が「学習上のため」に有益なテキストであれば、この四名の学力・学習意欲などを考えれば、最も教えるべき「生徒」は彦介だったはずである。しかし、その形跡はない。

では、松陰は繁之助に何故、それもいきなり『父師善誘法』を教えたのであろうか。考えられる理由が一つある。それは、繁之助の学力、思想的バクトル、「弟友」なる性格などから、松陰が繁之助を従弟玉木彦介のカツプリング相手にしようと考え、その事前教育として教師論・教授法などを教えようとしたことである。⁽⁶³⁾

「関係人物略伝」は後の繁之助のことを「松陰の没後国事に奔走し、文久二年十月京都に於ける松陰の慰霊祭に列す。元治元年藩世子近侍として機密に参与し、命に依り亡命せる高杉東行を京都より連戻したるはこの人等なり」と記している。⁽⁶⁴⁾ 松陰の願った通り、否、それ以上に繁之助は育ち、「志士」として活躍したことが分かる。

(五) 佐々木梅三郎

表7は佐々木梅三郎に対する教育記録である。

佐々木梅三郎は龜之助・謙藏の弟で天保十一年生まれ。「安政二年末松陰が幽室に於て父兄親戚に孟子の講義をなせる以来の門人にして、安政五年にも松下村塾にあり」といわれる人物である。⁽⁶⁵⁾

安政三年八月からの『武教小学』会に参加していた十七歳の梅三郎に対し、松陰は十月より翌、四年六月にかけて、計十五回、個人教育で『陰徳太平記』会を行っている。『陰徳太平記』は上述したように、萩藩祖「毛利元就（洞春公）

吉田松陰における幽囚室教育の「生徒」・テキスト考（川口）

表6 安政三年十二月 丙辰日記にみる教授状況

		日本外史	兵要録	農家益	父師善誘法	晉語	國語	孝経	唐鑑	左伝百合之助	名臣言行録	計
1	吉田榮太郎	12				1	4	1	2			20
2	増野徳民	12				1	4	1	2			20
3	玉木彦介	1						1				2
4	岡部繁之助	8	1		4							13
5	杉百合之助									0(6)		0(6)
6	杉梅太郎			0(1)							0(1)	0(2)
	計	33	1	0(1)	4	2	8	3	4	0(6)	0(1)	55(8)

表7 佐々木梅三郎教育記録

年	月	和 書								漢籍		計	合計
		武教小学	日本外史	陰徳太平記	坤輿図識	長井記	女誠訳述	吉田物語附尾	計	礼記	孟子		
安政3	8	1							1				1
	9	2							2				2
	10			8					8	1		1	9
	11			3					3				3
	12												
安政4	1		1		6	1			8		1	1	9
	2			2					2				2
	3			1					1				1
	4												
	5					1			1				1
	6			1			1	1	3				3
	7												
	8												
	9												
	10												
	11												
計		3	1	15	6	1	1	1	29	1	1	2	31

を理想的人物として描いた軍記で、「文体は混淆文で、難字や人名にはルビが付してあり、初学者に適したテキスト」といわれ、松陰も「大いに幼学に便なり」と評した書籍である。

後、安政五年二月、松陰は佐々木謙藏・岡部富太郎・中谷茂十郎にあてた書中に、「書を読むこと専精なるときは、積みて文弱萎靡の風を為し、其の諸生を害すること浅鮮ならず。足下三生の傍ら撃剣を修むるは、以て其の弊を救ふに足るか」として「諸生中熱中撃剣する者」の名前を記している。その中に梅三郎の名前もある。これより、梅三郎は「準銃撃剣の方面に於て塾生を誘掖せり」といわれた次兄謙藏に従い、撃剣に熱中していた可能性がある。よって、長兄龜之助に比し梅三郎は学力に問題があったことが原因かと思われる。

また、松陰は安政四年一月には『坤輿図識』会に七回参加させている。『坤輿図識』は地理誌ではあるが、地理的事項の他、「各国の歴史的人物」「歴山王」^{アレキサンデル}「亜里斯多テレス」^{アリストテレス}「伯徳球」^{ビョートル}「那波列翁」^{ナポレオン}などの「略伝」⁶⁸があり、あるいはこれを学ばせることが目的だったのかもしれない。

佐々木梅三郎について「関係人物略伝」は「その後国事に活動せるものの如きも詳細は明かならず」⁶⁹と記すのみである。

おわりに

以上より以下のことが指摘できる。

一、松陰の教育目的は終始一貫同志・シンパサイザーの養成・獲得である。そのため、松陰は来室者に対し、学力、学習意欲、学習目的、被教育歴、性格、家庭環境（兄弟・親の職業を継ぐ必要の有無）、尊王・攘夷思想の有無・濃淡、癸丑甲寅の「米国艦隊来航」衝撃体験の有無・濃淡（我が国の危機感を自分のものとして経験したか否か）、「他国」体験の有無・濃淡（井蛙意識からの脱却＝萩藩ではなく日本国の自覚）などの観点から、「生徒」理解を実施した。

二、それに基づき、松陰は「尊王攘夷」思想をもつ同志・シンパサイザー養成という最終目的に向け、「生徒」毎に「生徒」の成長に合わせた系統的なカリキュラムを準備し、継続的に参加すべき勉強会を指定した。

三、松陰は集団教育の教育的意義を理解しており、勉強会におけるカップリング・グループングなどを行った。カップリングは増野に対する吉田榮太郎、玉木彦介に対する岡部繁之助である。これは基礎教育という意味が強かった。一方、グループ教育におけるリーダーは、基礎学力・思想的ベクトルが確かで、同時に、嘉永六年の米国艦隊来航時、江戸でその衝撃を直接経験し、その後、「萩と江戸」の「往復」を「数度」経験したという社会経験、人生経験共に豊富な吉田榮太郎である。榮太郎は将に幽囚室教育における精神的・学問的リーダーであった。松陰は他の「生徒」が榮太郎に学ぶことを期待したのである。この意味では、松陰が一番「生徒」に語りたい「尊王攘夷」思想を、同じ「生徒」という立場にある榮太郎から他の「生徒」に直接語らせたことは感嘆の他ない。松陰は経験から、その教育的効果の大きさを知っていたものと思われる。

四、松陰は学力・学習意欲・思想的に問題のある「生徒」に対しては、表8にあるように個人教育を行った。

山賀生	大賀春哉	國司仙吉	高橋藤之進	土屋恭平	中谷茂十郎カ	冷泉雅二郎	提山	佐世八十郎	計	総計
									0	0
1 新論									1	5
									30	44
									3	8
									5	5
	1 医学の要	3 礼記							4	10
		1 礼記							4	7
									0	1
									1	1
			1 唐宋八家 文大蘇						1	3
									0	0
									2	5
									1	1
				1 陳龍川文抄					1	1
									0	0
					1 古文所見集				1	1
						1 白石遺文	1 日本政記	1 楊升菴文集	3	3
1	1	4	1	1	1	1	1	1	57	95
1	3	5	1	1	1	1	1	1		
100	33.3	80	100	100	100	100	100	100		

表8 個人教育記録

年 月		玉木彦介	佐々木梅三郎	佐々木謙藏	高須瀧之允	倉橋直之助	計	増野徳民	吉田榮太郎	岡部繁之助
安政3	8									
1	9	2 蒙求			2 陰徳太平記		4			
	10	5 陳龍川文抄	8 陰徳太平記			1 礼記	14	30 春秋左氏伝		
	11	2 陳龍川文抄	3 陰徳太平記				5	3 春秋左氏伝		
	12									1 兵要録・4 父師善誘法
安政4	1	5 方正学文粹	1 坤輿図説				6			
	2	1 方正学文粹	2 陰徳太平記				3		1 周南の文	2 中庸
0	3		1 陰徳太平記				1			
	4								1 茶山詩	
	5	1 山陽詩抄	1 長井記				2			
	閏5									
	6		1 陰徳太平記・1 吉田物語附尾	1 懲慈録			3	1 詩経品物図攷		1 精里三集
	7									1 精里三集
	8									
	9									
	10									
	11									
計		16	18	1	2	1	38	34	2	9
個人の 全受講数		46	31	11	3	4		118	82	39
個人教育 受講率%		34.8	58.1	9.1	66.7	25		28.8	2.4	23.1

これより、個人教育は増野徳民（個人教育述べ三四回／参加勉強会述べ一八回、個人教育率二八・八％、以下。三四／一一八、二八・八と略記する。）、吉田榮太郎（二／八二、二・四）、玉木彦介（二六／四六、三四・八）、岡部繁之助（九／三九、二三・一）、佐々木梅三郎（一八／三一、五八・二）であつた。佐々木梅三郎、玉木彦介への個人教育率が高かつたことが分かる。増野徳民は来室時の安政三年十月、十一月に集中している。一方、吉田榮太郎に対してはわずか二回でしかない。

佐々木梅三郎及び玉木彦介へのそれは、使用したテキストの内容より、学力・学習意欲・尊王思想などの強化が目的であつたことが分かる。その意味で、安政四年六月まで佐々木梅三郎への個人教育を継続していることは、松陰が依然その必要を感じていたからであらう。松陰が各「生徒」の成長に配慮しながら、教育を進めていたことが分かる。以上、安政三年八月から翌、四年十一月までの幽囚室教育を論考した。これは終始一貫同志・シンパサイザー養成が目的であつたとみていい。⁽⁷⁰⁾

しかし、そうであれば、実に不思議なことがある。それは、安政三年八月から安政四年十一月迄の幽囚室における読書・教育に関する史料である「野山獄読書記」・「丁巳日乗」に、安政三年五、六月頃、「儻使方今如弘安、彼請互市、我对曰、国法有禁、彼強之則宜斬其使」⁽⁷¹⁾との手紙を寄せながらも、「幽室に於て親しく教を受けるに至りしは、翌年のことなるべし」⁽⁷²⁾といわれる久坂玄瑞及び「安政四年十九歳の夏秋の間松下村塾に入門」⁽⁷³⁾したとされる高杉晋作の学習・教育記録が全くないことである。また、「安政三年末松陰を幽室に訪ひて詩を問ひ、爾来その教を受け、又次々に来れる俊英と交り、遂に尊皇愛国の人となり」、「増野徳民・吉田榮太郎と共に松陰の主宰する松下村塾に基礎を置ける功労者なり」⁽⁷⁴⁾と称される松浦龜太郎知新松洞の学習・教育状況などを語る史料が「野山獄読書記」安政四年三月の条の「一、朱竹垞文粹五 六 徳・榮・龜と与に（中略）一、詩経集伝八冊一 龜・徳・榮の爲めに」⁽⁷⁵⁾、「丁巳詩稿」

同三月の条の「三月念三夜、孟子会の後、知新・榮太・徳民と春夜小集を賦し、題を分ち韵と為す」⁽⁷⁶⁾、また、「丁巳日乗」同年八月十五日の条の「松洞を飲餞す」⁽⁷⁷⁾しか見当たらないことである。

この理由については、安政四年以降、来室者の増加に伴い、松陰が多忙となったからとか、記録を残すことを憚られる内容の教育をしていたからとか、とりわけ「詩を問」う松浦は松陰の教育目的からすれば特殊な来室者であったからなど色々と臆測することはできる。⁽⁷⁸⁾

そこで、私は次に「野山獄読書記」や「丁巳日乗」など松陰が残したものには、久坂玄瑞・高杉晋作の学習・教育記録がなぜないのかということや増野徳民の記録が少ないという問題を考えたい。それは、幽囚室教育と松下村塾教育に連続性はあったのか否か。それぞれの教育レベル、つまり、寺子屋だったのか私塾か。それとも、「教育」⁽⁷⁹⁾機関ではなく、当初から政治集団だったのか。松陰は幽囚室と松下村塾における教育をどう認識していたのか。このような疑問を解明するための第一歩と考えるからである。

「小生住居は秋の東隅にて松本と申す所にて、同志の会所を松下村塾と申し候」⁽⁸⁰⁾とは、安政六年九月十一日、松陰から同囚堀江克之助宛書簡の一節である。松陰がこの時点で松下村塾を「同志の会所」と認識していたことだけではない。⁽⁸¹⁾

註

- (1) 「葉山左内宛」(山口県教育会編『吉田松陰全集』大和書房、昭和四十七年、七卷、六五頁)。以下、同全集からの引用は、「葉山左内宛」(『全集』七卷、六五頁)。と略記する。なお、松陰は嘉永四年七月五日のこの書簡に「都下の大家は四方より生徒余分会聚」(「葉山左内宛」『全集』七卷、六五頁。)と記しており、以後「生徒」という用例を見ることができる。安政二年四月

八日「学中の生徒才あり識ある者を糾めて」（「中村道太郎に与ふる書」『全集』二卷、三二八頁。）、同四年九月十日「頃ろ又事に困り煙管を折り去りし四生徒あり」（「月性宛」『全集』七卷、五〇二頁。）、そして、同五年三月下旬の「外弟久保清太、夙に育材の志を抱き、二三の友と謀り、富永有隣を獄より抜き、又松下塾を増廓して、以て邑人を教ふ。其の志甚だ鋭にして、生徒日に集まる」（「久保清太・富永有隣及び村塾諸子、萩野時行と同じく高佐に遊ぶを送る敘」『全集』四卷、三三三頁。）等である。

(2) 拙稿「吉田松陰における幽囚室教育の月毎変遷考」（皇學館大學人文學會編『皇學館論叢』第五十四卷、第三号、令和三年十月、三〇―八二頁）参照。

(3) 福本義亮『吉田松陰の殉国教育』誠文堂、昭和八年、六四三頁。増野徳民の研究家友定英章氏によれば、「字」の「今中」は「今市」、父の名前「良庵」は「謙敬」「寛道幼名泰輔後号俊哲又称慮安」のまちがい、また、増野家は勘場医とのことである。

(4) 「関係人物略伝 増野徳民」（『全集』十卷、五九五頁）。

(5) 「丙辰日記」（『全集』九卷、四七九頁）。

(6) 弘中道順「松陰門下の増野徳民」（郷土岩国史談会編『山代文化』郷土岩国史談会、昭和二十四年、九頁）。これによれば、増野の兄弟は妹「波奈」のみであることが分かる。

(7) 安政四年八月、松陰は幽囚室教育時代を回顧した中で、「徳民は縝密にして書を読み、精苦人に絶す、一歳の間、其の鈔し且つ録する所、哀然として数大冊を成す。而も其の務むる所、家業を離れず、末枝に癈せず。衆方に喧嘩叫囂して、天下の大計を論ずれども、徳民は則ち退坐して燈を剔り吃々として読抄し、衆倦み且つ臥すと雖も、而も廢せざるなり。而して其の事に臨むに当りては則ち激論抗議し、未だ嘗て少しも屈せず」（乾、字は無咎の説）（『全集』四卷、一一五頁。）と記している。

(8) 増野については、「惻巧なたちであつて常に先生の髪を結び或は衣類の始末などをするといふ工合であり、殊に村塾の炊事掛として皆のものより喜ばれて居たとの事である、処が某日一門生より苟くも先生の頭髮に手をふれ而かも先生の身邊を調理す

るといふが如きは正しき人格者でなくてはならないにも拘らず、徳民は其性状阿諛奸佞にして偽行が尠くない様である、それを先生が信用して可愛がられるとは甚だ解し難い所であると云ひ出した、先生は之れを耳にして謂はるるには決して自分は徳民を信用して居るわけではない、其の性は当に其言の通である、然るが故に余の身辺をまかすに於ては彼も自然と自重自覚して其非を悟り悔悟するに至るべしと門生に漏された」（福本義亮『吉田松陰の殉国教育』誠文堂、昭和八年、六四三頁。）という逸話もある。

(9) 貝原益軒著石川謙校訂『養生訓・和俗童子訓』岩波書店、一九七六年、二五一頁。

(10) 青木歳幸『江戸時代の医学 名医たちの三〇〇年』吉川弘文館、二〇二二年、六九―七〇頁。

(11) 前書、一〇七頁。

(12) 前書、一三五―一三七頁。

(13) 来栖守衛『松陰先生と吉田稔麿』マツノ書店、平成二年、一七頁。

(14) 前書、一八頁。

(15) 「関係人物略伝 増野徳民」（『全集』十卷、五九五頁）。

(16) 「関係人物略伝 吉田榮太郎」（『全集』十卷、六二七頁）。

(17) 「秀實、字は無逸の説」（『全集』四卷、八四頁）。

(18) 「乾、字は無答の説」（『全集』四卷、一一五頁）。

(19) 後、安政六年一月十日、松陰は「真に何事も奇策なくば、皆々目を引きつぶし刻苦読書などの人物を拵へ立つるより外手段之れなく候。併し小生初め八人其の他の同志いづれも盛んとは申しながら、此の儘にて三五年もゆくと節の撓まぬという受合は立ち難く候と申さば不平の人もあるべけれども、人は父母の存没妻子の有無等にて時々変革あるなり。確節の修行怠るべからず。もし同志中に節の移り候人あらば同志中一統の大恥なり」（佐世八十郎・岡部富太郎・入江杉藏宛）（『全集』八卷、

一八〇一―一八一頁。」と語り、二十三日には、吉田榮太郎にあて、「足下の質は非常なり。足下の才も非常なり、憂ふる所は學問未だ足らざるのみ。唯だ願はくは古書を読み、古人に交はり、古人の爲す所を爲して、古人の思ふ所を思ひ、得るあらば教へられよ。今の志士は道ふに足らざるなり」(『無逸に与ふ』『全集』五卷、一六〇頁。)と送っている。これより、松陰のいう「確節の修行」とは「古人」の「爲す所」「思ふ所」に学び、実行することであることが分かる。

(20) 古谷久綱『藤公余影』民友社出版部、明治四十三年、五三一―五四頁。

(21) 瀧本誠一『經濟要録』岩波書店、昭和三年、二三四頁。

(22) 「兄杉梅太郎宛」(『全集』七卷、三六四頁)。松陰は安政二年十一月九日にも、「民を富厚するは政の本なり、民を賑恤するは政の末なり」(『儲嫖話』『全集』二卷、一七八頁。)と記している。

(23) 小泉吉永『江戸時代庶民文庫55 外国地誌』坤輿図識(正編)』大空社、二〇一五年、二頁。

(24) 「丁巳日乗」安政四年二月六日の条には、「榮太郎来る、爲めに周南の文を読む。午後、徳民・榮太の爲めに周南の文を読む」(『丁巳日乗』『全集』九卷、五〇〇頁。)とある。これより、午前の来室は吉田榮太郎だけであり、よって、結果的に個人教育となった可能性がある。また「野山獄読書記」安政四年四月の条には、「茶山詩五冊 内一冊 榮と与に」(『全集』九卷、四四七頁。)とあるのみにて、個人教育を行った背景は不明である。

(25) 「講孟劄記」(『全集』三卷、三〇四頁)。

(26) 前書、二四九頁。

(27) 榮太郎死後、吉田家を継いだ妹フサの夫義久の甥で、義久死後、養子として吉田家を継いだ市郎右衛門の未亡人フミが語ったという、「松下村塾に在学中母と妹と寺参りをするので榮太郎に留守番をせよといったら、お飯を沢山たいて呉れといった。そんなに沢山たくとお米がなくなると云へはうちの米がなくなれば余所の米が余るではないかといった。帰りに見れば留守に鯨を味噌煮にして友達をつれて来て食ひちらしてあつたとの話、一寸気前がこんな風であつた」(来栖守衛『松陰先生と吉田稔

「鷹」マツノ書店、平成二年、一七二頁。）という逸話がある。榮太郎のこんな「気風」も松陰には他の来室者のリーダー役として好ましく見えたのかも知れない。

(28) 「丙辰秋冬稿」(『全集』六卷、一五二―一五四頁)。

(29) このような記録は管見の及ぶ限り「野山獄読書記」・「丙辰日記」にはない。

(30) 「吉田榮太郎宛」(『全集』七卷、四九八頁)。

(31) 「長原武宛」(『全集』七卷、四九九頁)。

(32) 「桂小五郎宛」(『全集』七卷、五〇〇―五〇一頁)。なお、安政四年閏五月には、松陰は榮太郎に富永有隣への書を代筆させている。「吉田榮太郎より富永有隣に贈る〈松陰の命に依り代筆〉」(山口県教育会編『吉田松陰全集』岩波書店、五卷、昭和十年四六〇―四六二頁)。参照。へへ内は割註。以下同。以下、同全集からの引用は、「吉田榮太郎より富永有隣に贈る〈松陰の命に依り代筆〉」(『定本全集』五卷、四六〇―四六二頁)と略記する。

(33) 安政二年冬、松陰は「城下の盟成る春秋の恥」(「松陰詩稿」『全集』六卷、一一四頁)と記している。

(34) 「榮太郎より里村伯父」(「来栖守衛」松陰先生と吉田稔麿」マツノ書店、平成二年、六六―六九頁)。

(35) 来栖守衛は「梅田利一」の話として、「池田屋の変新撰組の首領近藤勇が当時のことを話した日記を其甥にあたる人が持つてゐたが其中に『長州の士吉田稔麿なるものあり其の死最も天晴れ後世学ふべきものなり』と書いてあつた兎に角一旦藩邸に報告して更に出て奮闘して死したその時の態度に殊勝のことがあつて敵なからも之を見て感心したことと見える。是れ全く平素の覚悟修養の結果が事変に際して現はれたものである」(「来栖守衛」松陰先生と吉田稔麿」マツノ書店、平成二年、一七七頁)という逸話を記している。

(36) 「関係人物略伝 玉木彦介」(『全集』十卷、五五六頁)。

(37) 「叔父玉木文之進宛」(『全集』七卷、六一頁)。

吉田松陰における幽囚室教育の「生徒」・テキスト考(川口)

- (38) 「睡余事録」(『全集』九卷、二八三頁)。
- (39) 前書、二八九頁。
- (40) 「従弟玉木彦介に与ふる書」(『全集』二卷、三〇〇―三〇一頁)。
- (41) 「兄杉梅太郎と往復」(『全集』七卷、二六九頁)。
- (42) 安政二年一月十日頃の叔父玉木文之進あての書中に、「去る五日彦生加冠一段の御事と存じ奉り候」(「叔父玉木文之進宛」『全集』七卷、三三三頁。)とある。
- (43) 「彦介の元服を祝す」(『全集』六卷、七〇頁)。
- (44) 「士規七則」(『全集』二卷、三〇八―三二〇頁)。
- (45) 拙稿「吉田松陰における『生』の意義と理想的『死』の認識」(人間環境大学人間環境学研究『人間と環境―人間環境学研究』第8号、二〇一七年、一〇七―一二四頁。)参照。
- (46) 「従弟毅甫相撲に成せるに寄す」(『全集』六卷、一二四―一二五頁)。
- (47) 「叔父玉先生・従弟毅甫相成より帰るを喜ぶ」(『全集』六卷、一三四頁)。
- (48) 「講孟劄記」(『全集』三卷、二五一頁)。
- (49) 前書、三二三頁。
- (50) 「武教全書講録」(『全集』四卷、四〇頁)。
- (51) 柳町達也『中国古典新書 蒙求』明徳出版社、昭和四十九年、九頁。
- (52) 前書、二八六頁。
- (53) 「陳亮」(フランク・B・ギブニー編集『ブリタニカ国際大百科事典』ティビーエス・ブリタニカ、一九九三年、四五〇頁)。
- (54) 安政元年、松陰は方孝孺を「燕逆の誅より惨なるはなく、希直の節より烈なるはなし。坐して死す千余の人、親旧尽く時儼

たり。慰諭すれども詔を草せず、哭罵して其の舌を割かる。公が文時に禁ありしも、極天滅すべからず。永楽大全を纂するも、精金鉉鉄に映ず。正学死せりと雖も、種子未だ嘗て絶えず」〔「方孝孺」『全集』六卷、五二―五三頁。〕と絶賛している。

(55) 「第十一方正学文粹」(飯田傳一『漢文文法から解釈へ』東興社、昭和四年、二四―二四三頁)。

(56) 「関係人物略伝 玉木彦介」(『全集』十卷、五五六頁)。

(57) 妻木忠太『東原良藏傳 上巻』村田書店、昭和六十三年、六頁。

(58) 「関係人物略伝 岡部繁之助」(『全集』十卷、四九〇頁)。へへ内は割註。以下、同。

(59) 「関係人物略伝 岡部富太郎」(『全集』十卷、四九一頁)。

(60) 上巻には「父兄教子弟之法」「尊師抑師之法」「学問成就全頼師伝」、下巻には「教授童子書法」「童子学字法」「童子請書法」などの項目がある。

(61) 廣瀬豊『松陰先生の教育力』武蔵野書院、昭和九年、三八二―三八三頁。松陰の教育志向はあくまでも「同志」＝志士養成が目的である。私は、松陰が一般的「教育者」の自覚をもっていたが如き記述は廣瀬の臆測にしか過ぎない、と見ている。今後、これらの観点からの研究が必要と考える。廣瀬も「なほ松陰が此本を何年に初めて読んだか、又此本に対する批判所見と云ふやうなものや、安政三年暮れ以後用ひなかつたのか、岡部の外にも読まなかつたか、それはどういふ理由か、久坂が写した外には誰も写さなかつたか、塾内ではそれ程珍重されなかつたか、之れが岡部に与へた影響等、皆総べて未研究に属する。若しそれが明らかになれば松陰の教育思想は一層明瞭を加へるわけである」(前書、四〇〇頁。)と追記していることを付記しておく。

(62) 「関係人物略伝 岡部繁之助」には、安政「六年五月松陰東行の際送別の詩を賦す。松陰これを見て、『この人吾れ嘗て友弟を以てこれを目す。清太(外弟久保清太郎)も亦以て然りとなる、愛すべきなり』と評せり。以て親密の度を察すべし」(『全集』十卷、四九〇頁。)とある。松陰が繁之助を評価していたことが分かる。

(63) もう一つ考えられるのは、後、安政六年一月二十七日、松陰が入江杉藏にあて、岡部富太郎子楫のことを、安政六年一月

二十七日、「子楫は母賢に弟友なり、以て家を託するに足る。是れ宜しく責むるに国事を以てすべきなり。是れ吾が心赤の語なり、汝切に記せよ」(『子遠に語り』『全集』五卷、一八〇頁。)と送っていることである。岡部兄弟の叔父來原良三と松陰の關係を思えば、來原と松陰の間に、兄富太郎は「国事」に尽くさせる。一方、「弟友」なる弟繁之助は「賢」なる「母」に仕えて家を守らせる、という了解が早い時期からあったのかもしれない。繁之助は次男である。兄が存命である限り、他家へ養子にできるか、自活法を身につけるしかない。そこで、來原・松陰はその一つとして、寺子屋の師匠への道を考え、『父師善誘法』を教えた可能性はある。

(64) 「関係人物略伝 岡部繁之助」(『全集』十卷、四九〇頁)。

(65) 「関係人物略伝 佐々木梅三郎」(『全集』十卷、五三二頁)。

(66) 「佐謙・岡部・谷茂に与ふる書」(『全集』四卷、三〇八頁)。この「諸生中熱中擊劍する者」の中には、他に玉木彦介・吉熊次郎・佐々木龜之助の名前もある。

(67) 「関係人物略伝 佐々木謙藏」(『全集』十卷、五三三頁)。

(68) 小泉吉永『江戸時代庶民文庫56 外国地誌 坤輿図識(補編)』大空社、二〇一五年、二八三―三三〇頁。

(69) 「関係人物略伝 佐々木謙藏」(『全集』十卷、五三三頁)。

(70) 松陰の幽囚室教育を考える際には、松陰は我が国が非常時にであると認識しており、また、西欧的な「Education」という発想が本格的に入る前の時代であった、という視点を忘れるべきではない。

(71) 「奉呈義卿吉田君案下」(『定本全集』四卷、六九九頁)。

(72) 「関係人物略伝 久坂玄瑞」(『全集』十卷、五〇九頁)。

(73) 「関係人物略伝 高杉晋作」(『全集』十卷、五四九頁)。

(74) 「関係人物略伝」(『全集』九卷、五九六頁)。

(75) 「野山獄読書記」(『全集』九卷、四四六頁)。

(76) 「丁巳詩稿」(『全集』六卷、一五八頁)。

(77) 「丁巳日集」(『全集』九卷、五〇一頁)。

(78) 後、安政五年二月十二日、松陰は高杉晋作にあて、「僕、足下と交を納るるは、徒に読書稽古の爲めのみに非ず、固より報国の大計を建てんとすればなり。足下と清太と思慮周詳にして、僕の固より推許して倚頼する所なり」(「高杉暢夫に与ふ」『全集』四卷、三一〇頁。)と述べている。これより、高杉と「読書稽古」＝学問を行っていたことが分かる。梅溪昇氏は「晋作が松下村塾で松陰に師事した期間は約一年にすぎないが、その間に松陰の『幽室文稿』、『宋元明鑑紀奉使抄』、『三河拳母藩の儒医・竹村悔斎(蒼)の『奚所須窩(遺稿)』、唐宋の『八大家文集』などを読み、孫子・左伝などの会説にも加わったと思われ、また議論の間に晋作の得たものは少なくなかった。最も意義のあったのは、松陰の人格とその才学識見に直接触れて傾倒し、強い精神的紐帯を作り得たことであり、また、松陰の見識と愛情によって、よく競争相手として久坂玄瑞を与えられ、彼と切磋琢磨しつつ自らの人間的成長をとげるよう教訓・激励されたことであった」(梅溪昇『高杉晋作』吉川弘文館、二〇〇二年、三〇―三二頁。)と、松陰との学問については、「思われ」と述べるに止めている。また、松陰が「僕の固より推許して倚頼する所なり」とまで記していることは松陰と高杉の関係を見る上で注目される。

(79) 「関係人物略伝」には、増野徳民は「万延元年頃は主として久坂玄瑞の指導を受けて国事に活動」(「関係人物略伝 増野徳民」『全集』十卷、五九五頁。)したとある。あるいは幽囚室と松下村塾の位置関係を考える、一つのヒントとなる事例であろうか。

(80) 「堀江克之助宛」(『全集』八卷、三百八十九頁)。

(かわぐち まさあき・皇學館大学文学部特命教授、広島大学教育学修士)